

## ヘーゲル『精神現象学』の体系的な位置付けをめぐる問題

飯泉佑介(東京大学)

哲学は何から始めるべきかという問いは、哲学に固有の思考を特徴付ける根本問題の一つである。原理を目指して常識を懐疑し吟味する探究から哲学は始まっているのか、それとも、原理から始めてそれを展開し体系化することが哲学なのか。前者の企て抜きに後者の企てはありえないように見えるし、後者の企ては前者の企ての前提となっているようにも見える。哲学の自己規定にかかわる以上、この循環論めいた問題から逃れられる哲学的思考はないように思われる。

G.W.F. ヘーゲルの哲学においても、哲学の始原という問題はさまざまな形をとって現われる。その一つは、『精神現象学 (*Phänomenologie des Geistes*)』の体系的な位置付け、あるいは、『精神現象学』と『大論理学 (*Wissenschaft der Logik*)』との関係という論点である。それぞれの著作の課題を簡単にまとめるならば、『精神現象学』が意識という境位において現象知(常識)を徹底的に懐疑し吟味することによって、本来の知が絶対知、すなわち〈概念〉であることを論証するのに対して、『大論理学』はその〈概念〉の境位において根本諸カテゴリーを導出し、またその方法論(概念の自己運動)を正当化することで、後続する自然哲学と精神哲学を基礎付けるとされている。二つの代表的著作には、「学の体系 (*System der Wissenschaft*)」というヘーゲルの哲学構想の「第一部」、いわば「第一哲学」についてのヘーゲルの理解が反映されているのである。

しかし、その思想形成史を見るならば、こうしたヘーゲルの「第一哲学」理解は一筋縄ではいかないことが分かる。今日『精神現象学』として知られている著作は元来 1807 年に出版された『学の体系、第一部——精神現象学の学(もしくは「意識の経験の学」)』なのだが、当時のヘーゲルの構想では、この著作の後に『学の体系、第二部』として「論理学」が、さらに続けて実在哲学の二つの部門、つまり「自然哲学」と「精神哲学」が刊行されるはずだった。ところが実際には、1812年に『論理の学——第一巻、客観的論理学』(いわゆる『大論理学』の有論と本質論)が、1816年に『論理の学——第二巻、主観的論理学あるいは概念論』(『大論理学』の概念論)が刊行される一方、『精神現象学』に関しては、その内容の前半部だけがニュルンベルク・ギムナジウムにおける哲学入門講義で論じられたり、ハイデルベルク大学やベルリン大学での講義用に刊行された『哲学的諸学のエンツィクロペディ綱要』の精神哲学の中に位置付けられたりすることになる。さらに決定的なのは、1831年出版の『大論理学』第二版の序論において、「学の体系、第一部」としての『精神現象学』の撤回が明示されたことである。つまり、当初「体系第一部」として位置付けられていた『精神現象学』は、後年その地位を『大論理学』に譲ることになったと理解できるのである。

本発表の目的は、上述の思想形成史上の出来事を、「第一哲学」としての『精神現象学』の位置付けの変更として解釈し、その意味を明らかにすることである。発表者の解釈によれば、この変更は、『精神現象学』が本来は「体系第一部」ではなかったとか、哲学体系の構想がたまたま修正されたといったこ

とを意味するのではない。そうではなくて、『精神現象学』に内在する理論的要因のために不可避的な仕方では、「体系第一部」の座を明け渡さざるを得なくなったと解釈するのである。その要因とは、『精神現象学』が独特な仕方では理論的に前提する(非理論的なものとしての)歴史的現在である。

もっとも、『精神現象学』と『大論理学』の関係は上述の論点に尽きない多面性と複雑さを含んでいるため、そもそも『精神現象学』の位置付けの変更という論点を認めない解釈も少なくない。例えば、思想形成史を貫いた哲学体系の一貫性を前提にすることで、『精神現象学』を「学の体系、第一部」としては認めず、「予備学 (*Propedeutik*)」や単なる「学への導入」と見なす見解は未だに根強い。また一方、近年では、『精神現象学』と『大論理学』の関係を「弱めて」解釈することで、「学の体系」の体系性を問題視しない立場もある。しかし、本発表の解釈によれば、イェナ後期の体系構想における『精神現象学』と『大論理学』は必然的な関係であるし、『エンツィクロペディ』の体系構想における『大論理学』の位置付けは理論的に一貫している。唯一矛盾として現れてくるのは、二つの体系構想間の関係なのである。

ところで、二つの体系構想がそれぞれ理論的に一貫しているならば、両著の純粋に理論的な関係から『精神現象学』の位置付けの変更理由を導き出すことはできないように思われる。そこで本発表では、ヘーゲルが「学の体系」を特定の「時代」において必然的に成立する知と見なしていた点に着目したい。周知のように、ヘーゲルは『精神現象学』の序論で、「学」が成立する「時代」やその歴史的背景について詳しく論じているが、それは、単なる時事評論的な前置きではなく、フルダが明確に指摘しているように、「学への導入」にとって不可欠な「理論的前提」であると考えなければならない。このことは、『精神現象学』の構成と展開において「時間」とその止揚が決定的な役割を果たしている点からも根拠付けることができる。こうした点からすれば、「体系第一部」としての『精神現象学』が撤回されたのは、言ってしまうと、〈時代が変わったから〉に他ならない。『精神現象学』は理論的に特定の歴史的現在と結びついているために、その「導入」としての役割は歴史的に一回的なものだったと解釈することができるのである。

このような本発表の主張は、ヘーゲルの形而上学的な体系構想に非理論的な〈歴史〉が介入していることを表わしている。換言すれば、哲学的思考が〈時間的なもの〉との関わりの中でどのように自らを始めるかという始原問題の一つのモチーフに光を当てているのである。

なお、『精神現象学』と『大論理学』の関係という主題が、1960年代以降のヘーゲル哲学研究の議論、とりわけ H. F. フルダと O. ベゲラーの論争などにおける主要論点だったことはよく知られている。しかし、2000年代以降、英米圏でのヘーゲル哲学の再評価とともに『精神現象学』の新たな読解可能性が検討される中で、この論点が今日改めて注目を集めているという状況を踏まえ、本発表では、内外の最近の研究成果を取り入れながら議論を展開したい。